

恩師・室伏靖子先生

小嶋祥三

室伏靖子（ムロフシ・キヨコ）先生は京都大学霊長類研究所心理研究部門でわたしの上司だった。亡くなられた本吉良治先生と結婚されたので、今は本吉靖子先生だが、ここでは旧姓で通させていただきます。室伏先生は京都大学文学部の心理学の出身で、大学院を出た後だろうか（詳しく聞いていない）、アメリカのミシガン大学へ留学された。大学で Dr. R. H. Wurtz と一緒だったようだ。Wurtz は無麻酔のサルで眼球運動を制御し、上丘の機能の研究などで多くの業績を挙げた。わたしが NIH へ留学した時に、Wurtz は NIH 内の別の研究所に在籍しており、かれが主宰していた journal club に出席させてもらった。そんな関係でかれをわが家に招いた時に、室伏先生のことが話題になった。後に、Wurtz が霊長研に来た時に、室伏先生とうれしそうに再会するのを、横で眺めていた記憶がある。

わたしが赴任した 1972 年当時、室伏先生は助教授だった（昔の職階名で）。1975 年に先生は教授になられた。霊長類研究所は京都大学大学院理学研究科に属していたが、女性の教授は初めて？だったかもしれない。そして、先生は 1989 年に立命館大学に転出された。室伏先生を始め、わたしより前に在職していた浅野俊夫、渡辺（井深）允子さんも途中で転出された。これが心理部門の人事の風通しを良くしたことは疑いがない。わたしも室伏先生に倣って、還暦を前に研究所を去り、慶應義塾大学へ移った（この美しい？「慣習」は、残念ながら、わたしで終わったようだ）。

霊長類研究所は来年、創立 50 年になるそうだ。このホームページで室伏先生に対する感謝を述べたが、この機会に再度取り上げる。1992 年に研究所は創立 25 年だった。室伏先生の後を継いで、当時わたしは心理研究部門の教授だった。冊子『25 年のあゆみ』に部門の 25 年の研究の歩みを書いた。そして最後に室伏先生について述べているので、少し長い引用する。

「この 25 年間の大部分、心理研究部門は室伏の指導のもとにあった。室伏は立命館大学に移る時になって、初めて若手の助手や大学院生の教育・指導方針を語った。それは、若手の研究者が己の興味を追求するのをできる限り援助する、ということであった。浅野以下の教官や大学院生が自由に自分の道を歩むことができたことを、われわれは心に深く刻まねばならない。もし現在の心理部門の研究に見るべきものがあるとしたら、それはこのような室伏の指導方針の成果である。この方針が堅持されるかぎり、心理研究部門はその多様性と活力を失わないだろう。」

わたしはこの先生の方針を踏襲したつもりだ。この方針の有効性は一部門だけでなく研究所全体に当てはまるだろう。50 年経つと研究所は劣化すると聞いたことがある。しかし、この方針でやっていけば、若手研究者は伸び伸びと研究ができ、研究所は多様性と活力を

失うことはないだろう。

わたしが所長の時だったか、室伏先生に叙勲をという話が事務からあった。わたしが電話で先生のご意向をお伺いしたところ、「そんなもの要りません！」と強く言われた。先生らしいと思った。現在、先生は京都でひっそりと暮らしている。今年の春にお会いしたが、先生は新しい記憶をつくるのが難しいと言っておられたが、それ以外はお元気そうだった。